

..... 会 告

平成 13 年度見学会
「伊豆大島の噴火史と 1986 年噴火をふりかえる」

上記見学会を以下のように行ないます。

開催日：2001 年 10 月 19 日（金）

予 定：竹芝栈橋集合（8:20）

高速船アルパトロス 東京竹芝港 9:00 11:20 大島 15:30 18:50 東京竹芝港

大島では 4 ~ 5 時間の滞在（バスで移動）

観察地点：地層大切断面、三原山（なるべく前回の噴火後が観察できる場所を選びます）、波浮の港など。昼食付き。

案内者：鈴木毅彦（東京都立大学）

参加資格：会員および同伴者 1 名。

参加費：1000 円（資料・昼食代等：当日受付）。その他高速船代（往復約 1 万円）は実費負担となります。

募集人員：約 30 名（先着順）

申し込み：名前、連絡先（住所、電話記載）、所属を明記して、東京地学協会あてに電子メール（tyo-geog@ka2.so-net.ne.jp）または、はがきでお申し込みください。電話による受付はできません。締め切り 9 月 28 日（金）。

平成 13 年度地学を楽しむ会
「秩父盆地の地形と火山灰をみる」

東京地学協会では、地学の普及を目的として、一般の方々を対象とした講演会・見学会などを開催しております。本年の見学会は下記のような内容で開催することとなりましたので、お誘い合わせの上ご参加ください。なお、詳しい内容は追ってホームページ等でご案内いたします。

テーマ：秩父盆地の地形と火山灰をみる

開催日：2001 年 11 月 11 日（日）

予 定：8:30 東京地学協会集合、大型バスにて出発。昼食付き。18:00 ~ 19:00 東京帰着。

見学内容：尾田蔭丘陵のテフラ、前期旧石器遺跡なつ造問題に揺れる遺跡群、荒川の河岸段丘と長瀬の地形観察、武甲山など。

案内者：鈴木毅彦（東京都立大学理学部）

参加資格：地学に興味を持つ一般の方々（中・高生も含みます）および会員。

参加費：1000 円

定 員：約 35 名（先着順）

申し込み方法等：10 月 26 日（金）までに往復はがきに〔往信〕住所・氏名・年齢・連絡先電話番号を記入、〔返信〕連絡（返信）先宛名を記入し、協会事務局へ申し込んでください。協会から予約受付のお返事を差し上げますので、11 月 2 日（金）までに参加費 1000 円（資料代、昼食代など）を指定の方法で振込んで下さい。

申込先：〒102 0084 千代田区二番町 12 2 東京地学協会「地学を楽しむ会」

秋季講演会のお知らせ

日時：2001年11月10日(土) 13:15 ~ 15:30

会場：東京地学協会講堂

講演：

齋藤靖二(国立科学博物館)：砂粒の年代からみた日本列島の地質

砂粒には多様な起源のものが混在しており、よく知られているように、砂粒のサイズ、外形、鉱物組成、化学組成には供給源の地質から風化・運搬されて堆積するまでのプロセスが反映されている。ところが砂粒の年代は、供給源について別の情報を提供してくれる。ここでは、日本列島の砂岩を構成する砂粒の年代と大陸の地質との関係について紹介する。

富田幸光(国立科学博物館)：日本最大の恐竜「鳥羽竜」とその産出意義

1996年夏、大型の恐竜化石が三重県鳥羽市で発見・発掘された。その後4年以上にわたってクリーニングと研究が続けられ、2001年3月に一応の報告書の出版をみた。今年10月にはアメリカの古脊椎動物学会での発表も予定されている。本講演では、「鳥羽竜」と通称されているこの竜脚類恐竜について、その研究結果と化石の産出が意味するところを概説する。

第5回海外巡検「中国の四川と雲南の恐竜見学」の実施について(速報)

本協会では標記巡検「中国の四川と雲南の恐竜見学」を企画しています。

時期：2002年1月中の8日間程度。

見学場所：四川省自貢の恐竜博物館、雲南省ルーフェンの恐竜産地、雲南省の昆明自然史博物館など。

詳細・募集方法等につきましては、10月25日発行の本誌5号およびホームページでご案内いたします。

地学クラブのお知らせ

下記により地学クラブを開催いたします。多数ご参加くださるよう、お待ちいたしております。講演終了後、1時間ほど講演者を囲み懇談の時間を設けますので、ご自由にご参加ください。

・9月20日(木) 14:00 ~ 15:30 「独立行政法人と地質調査所の改革」

産業技術総合研究所深部地質環境研究センター長 小玉喜三郎

平成13年4月1日をもって、地質調査所をはじめ旧工業技術院傘下の15の研究所は独立行政法人産業技術総合研究所に統合された。地質調査所の業務はその中の「地質調査総合センター」によって引き継がれる。独立行政法人とは何か。なぜ、15の研究所を統合したか。「地質調査総合センター」の仕組みはどうなっているか。これらを通じて、新体制ではなにを改革しようと思図したのか。現実にスタートすると、設計図通りにはいかない面も多々あるが、それらの課題も含め紹介する。

- ・ 11月20日(火) 14:00 ~ 15:30 「世界の石油産業とパワーポリティックス」

石油公団・石油開発技術センターアドバイザー 林 雅雄

地質学を学んだおかげで、たまたま石油会社に職を得て、炭化水素の探査や石油利権取得の最前線に身をおくことのできた演者は、世界で発生する大きな政治的出来事のかなりの部分が、石油に密接に関係していると感じてきた。そのような見方に反対する方も当然いるだろうし、また長い目で見ればそれは全く的外れかもしれない。しかし、武力を政治力に代えて、パワーポリティックスがまかり通っているのが、石油産業の世界と言っても過言ではないかもしれない。石油を軸にして世の中の動きを見ると、報道されているのとは異なる解釈も成り立つことを伝えたい。

- ・ 12月20日(木) 14:00 ~ 15:30 「言語が消えるとき 台湾原住民の言語を例として」

元東京大学文学部教授・現跡見女子大学 土田 滋

世界中で少数民族の言語が消滅の危機に瀕している。そのような死に瀕した言語では、どのようなことが起こるのだろうか？ その言語を話せる人の数が少なくなり、話せる人もやがて思い出せる単語の数が次第に減ってくる。最後まで忘れずに思い出せる単語、つまり忘れ去られることに最後まで抵抗した単語とは、いったいどういうものだろうか？ いくつかの言語で、何か共通する語彙項目があるだろうか？ あるとすれば、それも一種の基礎語彙と言えそうに思えるが、どうだろうか？ これらの疑問を、台湾原住民諸語から二つの言語を例にして考察する。

